

# 府中市史編さんだより

第7号 平成31年(2019)4月25日



上空からみた是政付近

ふちゅう温故知新⑥

## 是政（これまさ）

是政は市域南部に位置する、東京競馬場の南東側一帯の多摩川競艇場を含む地域です。

是政の地名は、戦国時代の小田原北条氏に仕えた井田摂津守是政という人物が、古くは横山村と呼ばれた地を開拓したことから名付けられたと伝えられてきました（『新編武蔵風土記稿』）。東京競馬場の構内には井田一族の墓地があることが知られ、是政駅前商店街ではアレンジされた「これまさ君」が商店街のイメージキャラクターになっています。

市内では近世の新田開発で移り住んだ場所を飛び地とした地域がいくつかありますが、是政にもこうした例があります。若松町2丁目付近、浅間町1丁目付近、小金井市桜町玉川上水付近はそれぞれ、「通り是政」「人見是政」「小金井是政」と呼ばれました。また、多摩川を稲城市側に渡ったあたりは「向是政」と呼ばれ、ここは今も是政橋付近の一部が府中市是政の地番になっています。

大田南畝（註）は文化5年（1808）から6年にかけての年越しを是政で過ごしました。その際に井田佐兵衛家で系図を見て、三岡安右衛門家持の天満宮の掛軸を見たことが『調布日記』に記されています。三岡家の掛軸は、唐服をつけた天神像（菅原道真）が描かれており、市指定の文化財になっています。

最近、成城大学が所蔵する史料のなかには是政村の古文書が見つかり、府中市に寄託していただきました。今後、市史編さんで整理作業と内容調査を進めてまいります。

註：寛延2年（1749）一文政6年（1823）。狂歌三大家に数えられる文人・狂歌師。別号蜀山人の名で知られる。『調布日記』は彼が幕府役人として多摩川治水工事監督にあたったときの記録。

## 『新府中市史 自然編』をめざして

自然専門部会長・首都大学東京名誉教授

三上岳彦先生

このコーナーでは、市史編さん専門部会の部会長の先生にインタビューしています。

今回は、自然専門部会の三上岳彦先生からお話をうかがいました。

### 目指す市史自然編の姿

**事務局：**市民に読んでいただける市史自然編とはどういうものなのか、先生のお考えをお聞かせください。

**三上：**前回の府中市史は50年前に刊行されていますね。その内容を探していたら、自然史という部分しか見当たらない。その内容を見ると、地形・地質（土壌）・地下水といったいわゆる地面についての話ばかりでした。しかもそれは、市史の他の分野と同じ方法で様々な書物・文献を調べ、それを要約したもののようです。

今回は、地形や地質の他に、気象・気候も含めた府中市の自然環境がどうなっているのかを市民の方が読んで分かりやすいものにするべきだと思います。委員の方の専門が様々な分野にまたがっておられますから、現在の府中市はどうなのかを実際に現地で調査・観測した結果をわかりやすく図にまとめたりしていきたいと考えております。実際の府中市の自然環境を調査してわかりやすく解説することが一番重要です。それに沿ってまとめる予定です。

まず2019年度に刊行予定の自然編報告書では、自然を大きく、大気、水、大地（地形・土壌）、植物（植生）、動物にわけ、それぞれの専門分野の委員が府中市の状態について、できるだけ新しいデータを使って解説していくことになります。

2023年度に刊行予定の通史編で、この報告書の内容を踏まえて、さらに自然全体を扱っていく内容になると想定しています。

### 市内の気温調査について

**事務局：**先生は、気象学の第一人者であり、ヒートアイランドなどの都市気候の専門家として研究成果を発表されておりますので、それに関連して質問させていただきます。

従来は都心部の気温が高いため、ヒートアイ

ランドは都心部だけで起きている現象と捉えられてきたようです。ですが、市史編さんの調査の一環として先生が行われた調査により、どうやらそうではないことがわかってきたようです。それについて、先生のお考えをお聞かせください。

**三上：**夏が暑くなってきたためヒートアイランドとかよく言われるのですが、ヒートアイランドは、大きな都市の中心部の気温が高く、周辺の郊外に行くと気温が下がる現象で、冬にも見られます。等温線図を作ると、ちょうど熱の島のようになることから、そう呼ばれるのです。東京については、都心部の気温が高く、郊外に近づくと下がるという傾向はあるのですが、実は、都心という巨大なヒートアイランドの中心があって、それを囲む低温な郊外があるという図式以外に、小さなヒートアイランドは、いくつもあるのです。

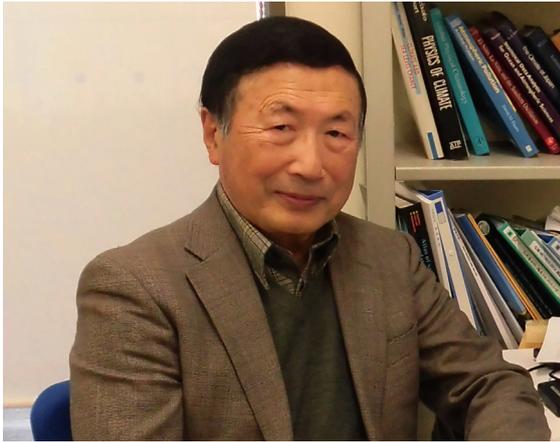
例えば都内では府中市や八王子市、埼玉県では浦和や大宮のそれぞれの市の中心部にあるのです。そういうものは、気象庁の観測している場所だけではデータが足りませんから、実際に測らないとわからないのです。そこで、市内全域をカバーする測定をすることにしました。

着目したのは府中市では公立小学校が市内各地に分散して設置されているということと、小学校には理科教育のために百葉箱が設置されているということです。それを利用させていただくことにしました。

2016年度から府中市内の公立小学校22校の協力を得て、百葉箱に小型の温湿度を自動的に測定して記録するデータロガーという装置を設置しました。小学校だけでカバーできない数か所にも百葉箱に代えてシェルターと呼ばれる覆いを付けた装置を設置しました。その後、10分間隔で気温と湿度を計測し続けています。

この方法は沢山の測定器を同じ場所に設置し、継続して観測する方法で「定点観測」と呼びます。そのデータを使って、府中市内の気温と湿度がどのように分布しているかを調べようとしています。

その一部の結果はすでに出ています、それ



三上岳彦先生

を見ますと府中市内で一番気温が高いのは府中駅周辺のビルがたくさん立っている場所でした。その周囲には気温が低い場所もありました。例えば市の北東部にある浅間山とその辺りは緑も多いので温度が低い。南の方に多摩川もありますので、その場所も少し低いです。

さらに、府中駅周辺が常に気温が高いのか、それとも季節や時間によって違うのかどうかも今、細かく調査しています。それとあわせて、特に夏の暑い時期に、気温が高い府中駅周辺のもっと細かな温度変化を調べようということで、平成29年8月と翌年7月に小中学校の児童・生徒さんの協力を得て、昼間の温度の観測を行いました。

これは「移動観測」という方法で、歩きながら気温を測っていく方法です。複数の班を編成し、班ごとに、別のルートを歩きながら気温を測っていただきました。それをまとめて、その日の特定の時間の気温がどうだったかを求めました。大國魂神社からけやき並木が南北方向に伸びていますが、このけやき並木は緑が豊かです。樹木のクールスポット効果というものもあります。これは樹木があることで地表への日射が遮られ日陰ができること、葉からの蒸散効果で温度が少し下がること（気化熱）を指します。この移動観測では、こういった効果も詳しく調べれば出てくるのではないかと考えました。

その結果、やはりけやき並木に沿ったところの気温は、周辺よりも比較的低下することが判明しました。このクールスポットが実際にあるということを確認できたことは重要です。市民である学校の児童・生徒さんが実際に測って目で見て確かめる、それは市民参加という点で大事なことです。

もう一つの調査は、歴史書と気候の関係を調べることです。例えば、江戸時代の府中は、今と比べて気候はどうだったのかは、皆さん興味を持たれると思います。しかし、普通の歴史書には気候に関してほとんど書かれていません。それは当然で、当時は気象観測なんてやっていませんでしたからね。

でも、江戸時代の古い日記が各地に残されています。府中市には『あがたいせいあろく県居井蛙録』という江戸時代の庶民の日記が35年間にわたって残されていました。この日記の特徴は、19世紀前半を中心に、毎日の天気を書いてあることです。しかも非常に詳しく、「風が少し吹いた」「天気で暖かい」「曇っている」「雨が降っている」といった記述も見られます。

過去の日記に天気を書いてあることを上手く使って、そこから気温がわからないだろうかということで、私の研究グループでは、全国の日記の天気を集め、気温を推定しています。その中で、特に夏の気温を日記の天気から推定しているのです。

例えば、7月は東京あたりでは梅雨が明ける時期で、それが遅れると気温が下がります。早くと太平洋高気圧に覆われて日照が多くなり7月初めから気温が上がります。その関係をうまく利用して、毎日の天気から逆に夏の気温を推定することにしました。

今の気象データを使って7月の平均気温と雨降りの日数（「降水日数」と呼びます）の関係をみると非常にきれいに相関関係があります（図1）。つまり降水日数が多い年は平均気温は低く、逆に降水日数が少ない年は平均気温は高いという関係があります。『県居井蛙録』の天気の記述から降水日数を集計し、平均気温を推定できるのです。

図2はそうやって求めた1802年から1836年までの7月の推定平均気温をグラフにしたものです。1810～1820年頃はかなり気温が高かったのですが、1830年代に入って少し気温が下がってきて、特に天保7年（1836）はこの35年間で一番夏の気温が低かったことが明らかになりました。実はこの年は「天保の大飢饉」の起きた年で、これまでの私たちの調査で全国的に異常に寒い夏だったと推定しています。やはり府中でもこの年は非常に寒い夏（「冷夏」）だったことがわかりました。

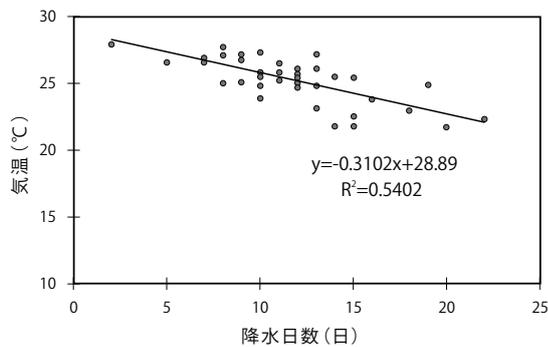


図1 アメダス府中における7月の降水日数と7月平均気温の関係（1977 - 2017）

翌年の「大塩平八郎の乱」は西日本で起きた事件ですが、大飢饉が続いたことが引き金になって起こったのではないかと考えています。

つまり、このような昔の気候がわかれば、それと飢饉との関係がわかることになります。

当時は稲作（米の生産）が重要でしたから、それに対し気候がどのように影響したのかを調べることは有意義です。例えば天明の飢饉の時（1780年代）を他の日記で調べるとやはり同様に気温が低かったことがわかります。他の農産物への影響はどうだったのかも調べるとおもしろいと思います。そういうことで、今回の『県居井蛙録』の天気に関する記述は非常に貴重な資料だと思っています。

夏以外の季節はどうだったのかは、まだ調査中ですが、この日記には「冷氣」という言葉が頻繁に出てきます。冬については「雪が終日降る」とか、「氷が張った」という記述も見られますから、冬の寒さはどうだったのかも調べていくことで、江戸時代の気候についてある程度推定できるのではないかと考えています。

### 地球環境問題について

**事務局：**市民の関心が高いのは生活に直接甚大な被害を与える豪雨や大型台風と、猛暑と大寒波という極端な気象変化が起きている原因についてです。

**三上：**2017年は西日本豪雨等が起こり、都市部では1時間に100mmというゲリラ豪雨が起っています。2018年はアメリカに大寒波が来て、今はそれが日本でも起きています。いわゆる異常気象ですが、それと地球温暖化とはどう関係するのかに皆さん関心があると思います。

それは府中市だけでなく、多くの地域で異常

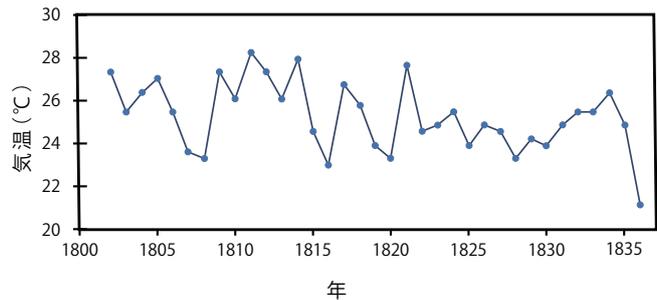


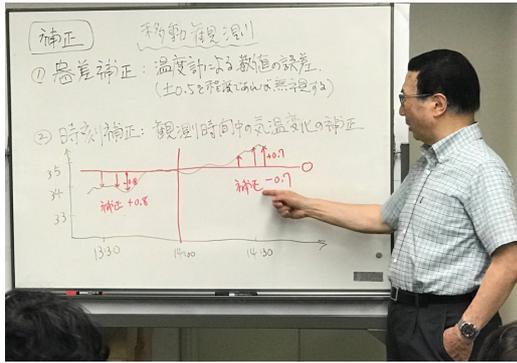
図2 『県居井蛙録』の降水日数から推定した7月平均気温（1802-1836）

気象が起きているということです。広い意味での環境問題であり市史の刊行物で取りあげる必要があると思っています。

先ほどヒートアイランドの話をしたしましたが、ヒートアイランドがすぐにゲリラ豪雨とかになるという話でもありません。地球規模の大規模な大気の流れ（偏西風）が上空をうねりながら流れているのですが、その流れが変わり、今年は北極の冷たい空気がアメリカの東部に流れてきて大寒波になっています。しかし一方で、南半球のオーストラリアでは、同じ時期に熱波が押し寄せています。

また2003年は、日本は冷夏でしたが、逆にヨーロッパは猛暑で数万人の方が亡くなったのです。この年の夏は、ヨーロッパの方に熱い空気が流れ込み、逆に日本の辺りは北からの寒気で冷夏になってしまったということです。北からの空気が下りて気温が低くなっている場所の西側には、南からの空気が上がって気温が高くなっている場所があります。

つまり寒くなっている場所があれば、逆に暑くなっている場所があり、地球全体ではバランスを保つようになっているのです。ある場所にだけ着目せず、地球全体で見るのが大切です。ただ、たまたま、いつもとは違う場所が寒くなったりするものですから異常気象だと言われたりします。寒くなる場所があると同時に暑くなる場所もある。でも地球全体で平均すると段々と気温は高くなっていて、それが地球温暖化です。少しずつですが、過去100年で地球の平均気温は約1℃上がっています。1℃というと大したことないと感じられるかもしれませんが、しかし毎年一律で上がっているわけではなく、上がった年と下がった年もある中で、100年間に1℃上がっているのです。



移動観測調査後説明の様子

地球温暖化が進むと、偏西風といった大気の流れに異常が生じ、「極端な気象」と呼ばれている「大雨」や「洪水」、「旱魃」などが起こりやすくなるでしょう。

このままでは100年後には3℃位は気温が上がると予測されています。CO<sub>2</sub>の排出を減らしていかないと温暖化が続くのはほぼ確実ですから、それに対しては世界中の人が協力してあたらなといけない問題です。ですが、気温を完全に元の状態に戻すことは難しいため、100年後の温度上昇を2℃以下に抑えることを目標とし、それ以上にならないように安定化させようというのが国際的な取り組みです。

気候変動の原因は複雑で、他に時間スケールとの関係が重要です。1万年、10万年というスケールで考えると、今は、数万年後にやってくる次の氷河期に向かって徐々に寒くなっている時期に相当します。

過去100万年間をみると、10万年周期で寒い氷河期と暖かい時期（間氷期）がくりかえし訪れます。今から2万年位前はマンモスが生きていた非常に寒い氷河期でした。1万年位前から今の温暖な気候に変わっています。そういう長い時間スケールの自然のサイクルとは別に、人間が出しているCO<sub>2</sub>による温暖化が急激に進んでいることは異常ですから、これを食い止めないといけないのです。

地球温暖化は長期的な気候変化の原因の一つではありますが、それだけではありません。他に気候を変化させる原因としては、火山の大噴火があります。

『県居井蛙録』の記述から推定した気候変動の中で、一つ興味深いことがありました。1816年7月の気温が前年よりかなり下がっています。この年は、ヨーロッパやアメリカでは「夏が無い年」と呼ばれていて、夏がものす

ごく寒い年として有名です。その原因は前年の1815年にインドネシアのタンボラという火山が史上最大の巨大噴火を起こしたことだと考えられています。この時の噴火で山頂の1000m分位が吹き飛び大量の火山灰と火山ガスが空中に放出されました。特に火山ガスは地球全体を覆い、日射を弱めてかなり気温を下げました。当時、ヨーロッパやアメリカでは夏でも雪が降ったという記録もあります。

ところが日本については、あまり良くわかっていなかったのです。我々が調べても特に寒いという記録はありませんでした。そこで日本は普通だったのかなと思っていました。ですが『県居井蛙録』の天気の記事からは雨が多い年だと分かり、それが事実だとすれば、日本でも寒い夏であった可能性が高く、大発見になります。ただし、火山の噴火の影響はそんなに長く続きません。せいぜい2～3年です。

その他に気候変動の原因として、太陽の活動があります。太陽から届く日射量も少しずつ変化していますから、それによっても気温は変動します。太陽の活動にも周期的変化があります。江戸時代には小氷期という少し寒い時代がありました。その時期は太陽の活動が少し弱まっていたのは事実です。

つまり、地球の気候の変動はCO<sub>2</sub>だけで決まるわけではなく、色々な原因が重なっているのです。将来的に巨大噴火が頻繁に起きるようになったら確実に寒冷化するでしょう。ですが、それは予測できません。人間が出すCO<sub>2</sub>で温室効果が強まり、それで温暖化するというのが、今のところ、一番大きな原因だというのが、世界中の研究者の一致した意見です。

それ以外の原因も含めて考えた場合、50年後、100年後の気候がどうなるかは分かりませんが、現在は人間活動によるCO<sub>2</sub>の増加が温暖化を強めているのはほぼ確実ですから、私たちは温暖化防止に向けた努力を続けることが大切だと考えます。

『府中市郷土の森博物館研究資料集 第1集  
 県居井蛙録 江戸時代の庶民の記録』  
 (2015年、府中市郷土の森博物館)



## 部 会 通 信

### 原始・古代専門部会

『新府中市史 原始・古代資料編1 考古資料1』と『新府中市史 原始・古代資料編2 文献史料』刊行の作業を進めました。

「資料編」というと通史編を作成する際の基礎となる資料や歴史的な根拠などを集成し掲載するものであるため、専門的でやや難解な部分があります。そこで『原始・古代資料編2』では理解しやすく、興味をもっていただけるように、史料を歴史の流れの順に並べ、各史料の初めに「綱文」と称する当該史料の示す事象について簡潔に記し、次いで史料原文、読み下し、解説と順に掲げました。また、この綱文を抜き出し、年代とともに並べた、古代武蔵の年表ともいえる細目次も作成しています。各史料原文には通し番号を付けて解説との関連性がわかりやすくなるように努め、難解な人名や用語にルビを付けるなどの作業を行いました。

『考古資料1』では旧石器時代～古墳時代前半までを集録し、飛鳥・奈良・平安時代は今年度刊行予定の『考古資料2』に収録します。

### 中世専門部会

中世部会では資料編の刊行に向けて体裁や掲載資料の選定など、具体的な検討を加えています。府中を中心とした中世資料を集積し、ご紹介できるよう構想しています。

また、この度刊行された『新府中市史研究 武蔵府中を考える』第1号では、中世部会の海老澤衷部会長、清水克行副部会長に資料編に向けたテーマで論文を執筆していただきました。府中の中世を考えるうえで非常に興味深い内容となっています。部会開催2回。

### 近世専門部会

2019年度に予定している「資料編(上)」「古文書目録」の刊行準備を進めています。「資料編」に掲載する江戸時代の古文書の解読やこれまでに調査した市内の古文書目録を見直す作業が中心となっています。

『新府中市史研究 武蔵府中を考える』第1号では、3つのテーマに関する古文書を紹介しています。府中で開催された馬頭観音の出開帳、四谷の新田開発、府中宿の規制に関する古文書をわかりやすく解読・解説していますので、ぜひご覧ください。部会開催3回。

### 近・現代専門部会

『新府中市史 近現代資料編 上』刊行の仕上げの作業を進めました。

また、続編として刊行予定の『新府中市史 近現代資料編 下』に向けて市内外の施設で調査を行い、近・現代の府中に関わる資料を網羅的に収集しています。特に、戦後から現代にかけての資料として、市民の方から資料提供や貴重な証言をいただきました。なかでも1964年の東京オリンピックに関わる調査では、聖火ランナーとして参加されたり競技を観戦された市民の方からの聞き取り調査や、50キロメートル競歩競技の折返点の記念として建立されたランナー像の調査を行いました。その成果は『新府中市史研究 武蔵府中を考える』第1号に掲載しています。部会開催4回。



ランナー像（府中市緑町）

## 自然専門部会

今年度に報告書を刊行すべく、各委員が今までの調査結果をまとめている段階です。

調査では、引き続き市内の小学校に協力していただき、通年の気温・湿度の観測データを収集しています。その他に、3月8日に浅間山の麓にある「人見稻荷神社」の植生調査を実施しました。ここは武蔵野台地上では珍しくシラカシの林が残ってる場所です。これらの調査の結果も報告書に反映する予定となっています。

## 民俗専門部会

2月3日の節分行事について、ふるさと府中歴史館内で聞き取り調査を行いました。

2月23日に講演会「祭礼の広がりめぐって一民俗学の視点から一」を開催しました。

2月25日に大國魂神社境内にある宮乃咩神社の奉納物調査を行い、願掛け奉納された絵馬・底抜け柄杓と、宮乃咩神社社殿内に掲げられている奉納額を一点一点確認しました。奉納額には岩戸伝説が描かれており、大正8年に境内の敷石新設を記念して奉納されたものでした。

## 市史編さんの活動記録 (平成30年10月～平成31年3月)

### 継続して行っている調査等

近世	：市内古文書目録作成・墓石調査	11月28日	自然専門部会
近・現代	：行政文書調査・記念碑調査	12月1日	中世専門部会
民俗	：祭礼調査、借用資料の整理、聞き取り調査等	3日	近・現代専門部会
		13日	三和交通インタビュー（三億円事件ツアーについて）
		18日	近世専門部会
10月2日	近世専門部会	19日	個人所蔵資料調査
3日	松本旅館資料調査	1月19日、	
9日	1964年東京オリンピック聖火ランナー経験者（村木茂さん）インタビュー	20日	多摩郷土誌フェア（刊行物販売）
		21日	近・現代専門部会
		30日	お日様文庫インタビュー
14日	クールスポット調査のパネル展示（市民文化の日）	2月3日	節分の民俗調査
		7日	近・現代専門部会
22日	1964年東京オリンピック観戦者（内藤里二さん）インタビュー	20日	成城大学図書館所蔵資料寄託受入
		23日	第5回市史講演会（民俗）
29日	近・現代専門部会	25日	宮乃咩神社調査
31日	1964年東京オリンピック聖火ランナー経験者（松林〈榎村〉眞澄さん）インタビュー	26日	花蔵院調査
		3月2日	中世専門部会
11月13日	民俗専門部会	5日	近世専門部会
13日、		19日	中河原念仏講調査
14日	西の市調査	28日	自然専門部会

### 前号以降、次の皆様にご協力をいただきました。ありがとうございました。（五十音順・敬称略）

秋元良夫、石川裕三、井上正望、市川閲子、市川紀子、大熊雅弘、小勝誠一、岡本暉子、小澤量、かぶらぎみなこ、菊池幹雄、許文英、後藤恵菜、小林尚子、小林勤、小峰孝男、ジョン・ポーター、須田雄介、高野スイ、高野宏峰、立石了、種村威史、内藤里二、長瀬芳美、林壽子、古橋研一、朴澤好美、堀智博、洪性旭、松田信彦、松林眞澄、村木茂、藪野健  
大國魂神社、お日様文庫、花蔵院、三和交通、成城大学図書館、帝京大学、東京外国語大学、中河原念仏講、府中市美術館、法音寺、公益財団法人府中文化振興財団

## 第5回 市史講演会「祭礼の広がりをめぐって—民俗学の視点から—」開催報告

2月23日にル・シーニュ6階（市民活動センタープラッツ第二会議室）で、第5回府中市史講演会を開催し、40名以上の方に参加していただきました。府中市史の編さんにあたる民俗専門部会委員から、「祭礼の広がり」について府中や府中の周辺地域を主な事例としてお話しいただきました。



八木橋伸浩先生



田中藤司先生



中里亮平先生

(1) 講演の冒頭には、民俗専門部会長の八木橋伸浩先生（玉川大学教授）から、各家庭でつくられている正月の雑煮を例に、民俗学が対象にするものについてお話しいただきました。民俗学は人々の語り（口碑伝承）を研究素材としてきましたが、新府中市史の民俗編ではこれに限らず、文献資料やモノ資料なども活用して編さんを行います。

(2) 地名変更後の地域組織の持続を描くことを狙いとして市内の神社祭礼・地域行事を調査している田中藤司先生（成城大学講師）からは、市内神社祭礼の一覧を示しながら、各地域の祭礼とその担い手となる地域組織について説明していただきました。

(3) 自身でもくらやみ祭に参加している中里亮平先生（長野大学講師）からは、歴史的な広がりや地域的な広がりについてご発表いただきました。くらやみ祭の変遷を整理しながら、江戸時代には江戸の祭礼とは異なる「民俗」としてくらやみ祭がイメージされていたこと、そしてその後くらやみ祭における神輿・太鼓の巨大化が多摩地域周辺の祭礼に影響を与えたことについて解説していただきました。

※講演の内容は『新府中市史研究 武蔵府中を考える』第2号に掲載する予定です。

### 新刊紹介

## 『新府中市史研究 武蔵府中を考える』第1号



市史編さん調査の過程で明らかになったことの速報、学術的に注目すべき新たな発見を紹介しています。

発行日 平成31年3月 頒布価格 500円  
頒布場所 ふるさと府中歴史館（3階）、郷土の森博物館、市政情報センター（ル・シーニュ5階）、市民相談室（市役所1階）、観光情報センター

府中市史編さんだより 第7号 平成31年(2019)4月25日

編集・発行 府中市文化スポーツ部ふるさと文化財課市史編さん担当

〒183-0023 東京都府中市宮町3丁目1番地 ふるさと府中歴史館

TEL 042-335-4376 <http://www.city.fuchu.tokyo.jp/bunka/bunka/shishihensan/>